

# 地域教材の活用をテーマとした授業実践

溝田浩二\*

## Practice of Environmental Education using Regional Teaching Materials

Koji MIZOTA

**要旨：**平成29年度宮城教育大学COC事業の一環として、初任者教員の多くが課題として認識している「地域教材の活用」をテーマにした講座を担当した。講義とフィールドワークを組み合わせた授業実践を通して、「校庭の教育資源を活用することで、教材の自給自足や体験学習の日常化ができること」を受講生に伝えることができた。

**キーワード：**地域教材、校庭の教育資源、自然体験、授業実践

### 1. はじめに

文部科学省では、平成25年度から国公立大学、短期大学および高等専門学校が自治体などと連携し、地域を志向した教育・研究・地域貢献を行う事業を支援する「地（知）の拠点整備事業（大学COC（Center of Community）事業）」の公募を始めた。宮城教育大学ではその初年度に「宮城協働モデルによる次世代型教育の開発・普及」というテーマの事業が採択され、平成29年度までの5年間にわたり、教員になってからも生涯にわたって自ら学び続け、その質的向上を目指す教員（イノベティブ・ティーチャー）の育成に取り組んでいる（松岡ほか，2017）。その内部組織であるイノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会では、地域性や喫緊のニーズがあるにも関わらず、本学の教員養成カリキュラム構造上の問題や必修・履修科目数等の制約などによりこれまで十分に対応できなかった内容・項目として、「防災教育」と「地域教材の活用」を挙げている。これは、平成27年度および平成28年度COC事業「現職教員アンケート」において初任者教員が課題として認識する内容項目に防災教育と地域教材の活用があったことによる。

そこで平成30年4月から教壇に立つ学生を対象にして「防災教育と地域教材の活用を学ぶ講座」が実施されることになった。これは学内カリキュラムでは十

分には扱いきれない「防災教育」および「地域教材の活用」についての情報提供と解説を行うものである。防災教育未来づくり総合研究センターの小田隆史准教授が「防災教育を学ぶ講座」を、社会科教育講座の堀田幸義准教授が「地域教材の活用を学ぶ講座（歴史編）」を、そして筆者が「地域教材の活用を学ぶ講座（自然環境編）」をそれぞれ担当することになった。本論文では、筆者が担当した授業実践について報告する。

### 2. 授業の概要

- ① 日時：平成29年11月29日（水）2時限
- ② テーマ：「校庭の教育資源活用術～教材の自給自足と体験学習の日常化をめざして」
- ③ 概要：自然体験は子どもの感性を育み、学習の基礎を形成する重要なものであるが、多忙をきわめる学校現場では疎かにされがちである。しかし、教員ひとりひとりが「校庭」の魅力に気づき、教材の自給自足に取り組むことで、自然体験学習の機会を日常的に提供することができる可能性がある。今回の講座では、大学キャンパスを散策しながら足元にたくさんの教材があることに気づき、校庭活用の可能性を模索してほしい。

\* 宮城教育大学教員キャリア研究機構



図1. パンフレット「宮城教育大学キャンパスミュージアム野外体験型教材めぐり」

④ 具体的内容：

＜講義（約30分間）＞

- ・自然体験（幼少期の五感を活用した原体験）の重要性について
- ・校庭の教育資源活用術（どのようにして教材を自給自足し、体験型学習を日常化するのか？）
- ・宮城教育大学のキャンパスミュージアム構想

＜フィールドワーク（約50分）＞

環境教育・自然教育では単に知識を学習するのではなく、身近な自然に五感で触れ、観察し、発見をおおして体験的に学習することが大切である。キャンパス内に設置された「バタフライガーデン」「ミツバチガーデン」「グリーンカーテン」「落ち葉リサイクル箱」などの野外体験型教材園（図1）を巡りながら、ふだんは見過ごしがちな草花や小動物に目を向け、それらが魅力的な教材となることを“体験を通して”学んでほしい。

3. 授業実践

授業に参加したのは初等教育課程10名、中等教育課程1名、特別支援教育課程1名の計12名である。

全員が平成30年4月から教壇に立つ（すなわち、教員採用試験に合格した）4年生であった。

前半の講義では、昆虫は子どもにとって一番身近な自然であり教材として活用できる潜在力が高いこと、五感を通じた自然体験は子どもの健全な成長に不可欠であること、「道草を食う」をテーマにした実践事例を紹介しながら“生きることは食べることと同義であること”、“校庭は教材を自給自足できる場であること”、“校庭では環境教育・食教育・防災教育といった体験学習を日常化できる場であること”を中心に伝えた。さらに、「遊び仕事」と呼ばれる営為（山菜採りやキノコ採り、潮干狩りや伝統養蜂など）には地域資源を生かす人々の知恵が詰まっており、地域教材の宝庫であることに言及した。

後半は教室を飛び出して、キャンパス内を散策した。視覚・聴覚以外の五感（嗅覚・味覚・触覚）を積極的に活用する体験活動を積極時に取り入れることを心がけた。具体的には、秋の七草（フジバカマの芳香をかぐ）、グリーンカーテン（オカワカメをかじる、フウセンカズラの種子を観察する：図2）、バタフライガーデン（カラタチの実をかじる、クサギ・サンショウ・



図2. グリーンカーテンでの解説のようす



図3. バタフライガーデンでの解説のようす

クスノキなどの匂いをかぐ、カタバミの葉で10円玉を磨く：図3）といった体験活動である。当日は肌寒い一日であり野外での体験活動には不向きな条件がそろっていたが、それでも視点を変えることで様々な体験活動ができること、足元には意外にたくさんの教材が転がっていることに受講生たちは気づいてくれた。

#### 4. アンケートの結果

授業終了後、宮城COCモデル構築プロジェクト事務局を通じて受講者への簡易なアンケートが実施された。アンケートの回収率は100%で、その結果を以下に示す。

##### ① 講座全体の満足度

「期待以上」が5名(42%)、「期待通り」が7名(58%)、「普通」「少し不満足」「不満足」はいずれも0名(0%)であり、かなり高い満足度が得られたことが伺える。

##### ② 参加者の感想(自由記述)

概ね肯定的な回答が得られ、受講した学生たちの期待に応えることができたように思われる。自由記述されたコメントは以下の通りである(原文まま)。

- フィールドワークが充実していて、よかった。
  - 昆虫に対する概念が自分の中で変わった。植物に関する知識が増えた。映像で見るだけでなく、実際に食べたり触ったり、嗅いだり五感をフル活用できた。
  - まず、自然体験の重要性を私自身も体験しながら感じる事ができたところが良かったです。また、授業などに実際に活用できる自然が、大学内には多くあることを知りました。教員として働き始めてから、勤務校の校庭や周辺の自然を活用した授業を作っていきたいと思いました。ありがとうございました！
  - フィールドワークでの活動で自然を取り入れた活動の幅が広がった。
  - 実際に見て触れて、食べてみる経験をすることで、これまで意識してこなかった身近にある植物のことを知ることができた。
  - 学校に生えているような植物を実際に触ったり嗅いだり食べたり、という体験は子供たちにとっては楽しみながら興味を持って学べる方法だと思いました。わたしも来年から五感を大切にしながら授業をしたいなと思いました。
  - フィールドワークで自然教材について体験ができたことが大変ためになった。
  - フィールドワークが楽しかった。食べられる草の中でも思ったより明白に味が違って、たくさんの発見があった。
  - 学校をめぐる様々な教材に触れることができた。紅葉の仕組みがわかった。
  - 実践的な内容を知ることができた。
  - 地域の自然を詳しく学ぶことができた。新しい知識をつけることができた。
- さらに、
- 季節毎の自然の活用例なども知れると嬉しい
  - 春夏秋冬それぞれやってほしい
- といった要望も寄せられた。

COC事業は本年度で終了するため、来年度以降もこのような講座を提供する機会があるか不明である。しかし、教員採用試験合格直後でモチベーションが高い学生たちは真剣に教育現場の現代的な課題を捉えて

おり、継続していく価値は十分にあると考えている。寄せられた要望を実現できるよう、前向きに検討してみたい。

## 謝辞

このような授業実践の機会を与えてくださった村上由則先生（宮城教育大学・教職大学院）、写真をご提供いただくとともに、アンケート結果をまとめてくださった小針善誠コーディネーター（宮城COCモデル

構築プロジェクト事務局）に心より御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費（16H03051）の助成を受けて実施された。

## 引用文献

松岡尚敏・村上由則・出口竜作・堀田幸義, 2017. 宮城教育大学における教員養成の軌跡と展望（2）—「イノバーティブ・ティーチャー」育成の視点から—。宮城教育大学紀要, 51: 19-35.